

「一億総ざんげ」とワイツゼッカー

馬奈木 昭雄

ドイツ元大統領のワイツゼッカーが亡くなった。有名な、「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」という言葉のほかにも、「われわれはみな過去に影響され、そして過去に責任を持つ」という重い言葉も残されています。ドイツには（国民には）「良いドイツ」と「悪いドイツ」があり、悪いのはナチスだったのだ、とか、「私はまだ生まれていなかったから関係ない」というような考え方をとらず、「ナチスの過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはいかない、われわれ全員が過去を引き受けなければならない」と、国民に呼びかけています。この言葉と対比して日本でいわれた戦争責任についての「一億総ざんげ」という言葉が思い起こされます。この両者の考え方は一見似ているようで、根本からまったく異なっています。そもそも「一億総ざんげ」はだれに対して何を「ざんげ」しようとしているのでしょうか。ここで言っているのは、「天皇」の戦争責任だけは何としても否定したいという願望でしかありません。侵略戦争をはじめた責任の中身も明らかにせず、被害を与えた諸国民に対する謝罪の気持ちすら示すこともない議論に、近隣諸国の共感を得ることはありえません。そもそもこの論者は、敗戦を「終戦」といいかえた人々です。私達は、私たちの祖父、父、そして私たち自身が過去に何を行い、どれだけの被害を与えたのか、を厳しく見つめ、そのことによって今私たちは何をしようとしているのか、わが子、孫達にいかなる未来を残そうとしているのかを見つめなおすことが問われています。わが子、孫を遠い外国に銃を持たせて送り出し、人殺しをしてこい、と激励の声をかける光景など二度とあってはならないと決意し、日本国憲法を制定したはずなのです。